

## 高校生の地震に関する意識調査 ～神戸市の場合その3～

A survey of how high school students in Kobe feel about earthquakes(3).

# 数越 達也 [1]

# Tatsuya Sugoshi[1]

[1] 須磨友が丘高

[1] STSHS

<http://homepage2.nifty.com/ja3tvi/>

地震に関する言葉の認知度、防災行動を取る割合、また中学校理科での地震教育が防災行動をとる原動力となっているかを知ることが地震防災教育の基礎的な資料だと考え 2003 年より 6 年間毎年調査を続けている。

兵庫県立須磨友が丘高校では 2 年次生徒全員を対象にアンケート調査を実施し解析をしている。対象は 2003 年度 2 年次生徒（震災当時小学校 2 年生 旧教育課程）から 2008 年度 2 年次生徒（震災当時 3 歳 現行教育課程）である。生徒の居住地域は主に神戸市須磨区、西区、垂水区などである。また対象生徒数は 280 から 240 人で、このうち地学を履修しているのは 2 から 8% である。

2004 年から同一のアンケート項目で調査を行なっているので、2004 年から 2008 年までの 5 学年の調査結果を比較・報告する。

1 次の言葉を知っているかは、大きな変化はない。数値は 2004 年度と 2008 年度

断層 91%, 95%

震度 99%, 98%

マグニチュード 97%, 97%

震源 99%, 98%

初期微動 99%, 97%

主要動 99%, 97%

2 “マグニチュード”と“震度”の違いを説明できるに、大きな変化はない。

2004 年度 30% 2008 年度 28%

3 阪神淡路大震災の経験を思い出す割合は減少している。

2004 年度 81% 2008 年度 57%

4 思い出す内容は大きな変化はない

揺れの恐怖、家の中がめちゃくちゃ、水に困った、避難した、火災が生じた

5 地震が発生したら最も怖い被害は大きな変化はない

2004 年度 火災 47% 家屋倒壊 45% 津波 5% 土砂崩れ 3%

2008 年度 火災 56% 家屋倒壊 54% 津波 6% 土砂崩れ 3%

6 自宅で震災対策をしている割合は減少、その内容には大きな変化はない

2004 年度 震災対策をしている 34%

懐中電灯 30% 家具の固定 24% 水・食料の備蓄 29%

2008 年度 震災対策をしている 21%

懐中電灯 25% 家具の固定 20% 水・食料の備蓄 24%

7 ボランティア意識とその内容は大きな変化はない

2004 年度 地震ボランティアをする 65%

救援物資の配付 23% 近所の人を救助 35% お年寄りの補助介護 7%

2008 年度 地震ボランティアをする 61%

救援物資の配付 26% 近所の人を救助 41% お年寄りの補助介護 8%

8 今後地震について学習したいと思いますか、は増加している。

2004 年度 40% 2008 年度 50%

考察

(1) 地震に関する理解度や防災行動をとる割合が、神戸は他の地域と比べて高い傾向は見られなかった。

(2) 2004 年以降は現行の学習指導要領であり、地震に関する言葉の認知度は高い。中学校で地震について学習した

と70%以上が回答しており、言葉の認知度は高い。

(3) 被災した年齢の低下とともに、阪神淡路大震災のことを思い出す割合は低下し、それに対応するように家庭での地震対策をしている割合も低下している。

(4) 高校生が地震について学びたいという意欲は40%(2004年)から50%(2008年)と高いにもかかわらず、地学が開講されていない高等学校が大多数であることは残念である。

アンケート集計に協力してくれた、須磨友が丘高校25回生、木村恭平君・松本弥子さん・吉田隼也君に感謝します。